

第一章 お人好し

2008年7月10日。彼は今日も、照りつける太陽の有り余るほどの恩恵を地肌にモロに受けながら、昼休みのひと時を過ごしていた。額を伝う汗も、慣れてしまえば気持ちいいもんだ…と、地面にゴロリと横たわり、ボンヤリと空を眺めていた。

「汗もすぐ乾いちまうな…これ、放っておくとカリッカリの塩の結晶になるんだよなあ…」

彼の名は相田瞬一。県内でもトップクラスの進学校に通う高校1年生である。別に彼は「昼寝が趣味」という訳ではないのだが、教室内の雑踏を好まない為、こうして外で過ごしているのだった。しかし、無防備にゴロ寝するには、今日の日差しは些か強すぎたようだ。目の前の視界がユラユラと揺らぎ、グルグルと回り始める。そして段々と意識が遠くなり、頭がボーっとし始める。まさに熱中症の一步手前、非常に危険な状態に彼の身体は晒されていた。

「……い。…おい。」

と、遥か遠くから聞こえるような声で、彼は失いかけた意識を何とか引き止め、無意識のうちにその声に対して返事をする。

「…誰だ？俺を呼ぶのは…あ、死んだ爺ちゃんが呼んでるのか…？」

「……イチ！おい！！シュンイチ！！バカ言ってねえで起きろっての！！」

「…んあ？」

声の主は、呆れたような顔で瞬一の隣にしゃがみ込む。ちょうど逆光になったため、その顔は影になって見えにくくなっていたが…身体を横たえていた瞬一が気を失っていない事を確認すると、彼は台詞に冗談を交えながら注意を促してくる。

「なあに限界に挑戦してんだよ。お前の干物なんか、売ってても誰も買わねえぞ。」

「あ…恭平か。」

瞬一のマスクな声に、更に呆れたような表情になる彼…守山恭平。

『『恭平か』じゃねえよ…あーあ、顔中に塩吹きやがって。マジで三途の川の向こうに逝っちまっても知らねえぞ。』

「とりあえず、自分の汗で塩漬けになるのは止めといた方がいいかな。」

身体を起こし、顔だけを恭平の方に向けたままで、ポリポリと額に張り付いた塩の結晶を掻き落とす瞬一。ボンヤリとした頭を揺り起こしながら、傍らにあったミネラルウォーターのペットボトルに手を伸ばし、一気に煽る。乾いた体に、適度にぬるくなっていた水が、心地良く吸い込まれていく。

「ところで…どうしたよ？ここんどこずっと、やたら眠そうじゃないか。」

「ん、ああ…ちょっと忙しくてね…」

授業中もずっと居眠り寸前の状態だった事をツツ込まれ、頭を掻きながら生返事をする瞬一。

「藤田に相談されてた、ホームページ作りの事か？」

「ああ。やってみると、なかなか難しくてさ。」

「人が良いにも程があるぞ、瞬一。別に断っても…」

「ん〜…どうにもね、断れないんだよね。困ってる人を見ると、ほっとけないっていうか…」

ここ数日の寝不足の理由を吐露する瞬一。彼は、クラスメイトの藤田から Web サイト作りの手伝いを頼まれ、彼自身も未経験に近い状態だということにも拘らず、眠い目を擦りながら毎晩パソコンと格闘していたのだ。

「それで自分が困ってたら、話にならんぞ。」

「ああ、わかってるよ。」

彼も、自分の世話好き…というか、お人好しな性格の事は、充分に理解してるつもりだった。だが、結果として幅広い分野でのスキルアップに繋がり、大概の事はソツ無くこなせるようになっていたので、まんざら悪い事ばかりじゃない…そう思うようにしていたのだ。

「…ったく…オマエのその性格、変わらんなあ。」

「言うなよ…そう簡単に直るもんじゃ無いって。」

苦笑いを浮かべながら、暗に注意を促す恭平。そういえばコイツには、入学式の時から言われっぱなしだなあ…と、瞬一はその時の事を思い出していた。

高校入学の日、いきなり遅刻をした瞬一は、理由を説明する間も与えられず、体育教師と思しき強面の教師に物凄い剣幕で怒鳴られていた。その時、何故か遅れた理由を知っていた恭平がフォローを入れてくれたのだった。

どうして遅刻の理由を知っていたのか、という事にも驚いたが…あんな強面の教師に意見できる男が今時いたのか…という事に感心し、その男になんとしても礼が言いたくなり、その後を追いかけて、思わず声をかけていた。

「あの…さっきは有難う、助かったよ。」

「お？おお。なんて事ないぜ、礼なんか要らねえよ。…だが、お前もお前だ。いいように怒鳴られてるんじゃないくて、自分の言いたい事ぐらい、しっかりと自分の口で言えよな。」

本当にハッキリ言う奴だな…と思ったが、悪い気はしなかった。むしろ、その清々しさは気持ちが良かった。

「ははは…気をつけるよ。あ、クラス一緒だよな？俺、相田瞬一。よろしく。」

「守山恭平だ、恭平でいいぜ。」

…と、回想に耽る間に予鈴が鳴り、午後の授業の開始が近い事を告げていた。

「お、予鈴だ。次は体育だぜ。」

「うげえ…すっかり水分を出した後に、また絞られんのかあ。」

午後に体育があるという不親切な時間割に対して文句を言う瞬一に、冷静なツッコミを入れる恭平。

「文句を言うなよ…それに水なら、ちっとは補給したんじゃないか？そいつでさ。」

「お？そういえば…あれ？俺、水なんか、いつの間に買ったんだろ？」

頭に疑問符を浮かべつつ、残りの水を飲み干そうと、瞬一はボトルに口をつけた。

「あ、それは、さっきまで俺が飲んでた残りだ。美味いだろ？」

「ぶほっ！！」

盛大に口から霧を吹く瞬一。

「あーあ、もったいねえ。世界的な水不足なんだぞ、今。」

「せ、せめて口つける前に止めろよお〜。」

その瞬一のリアクションを見ても、なおも冷静な恭平。彼のマイペース振りは大したものである。

「ほれ、早く行かないと、鬼軍曹に絞られるぞ？ゾーキンみたいに。」

「う〜、あとでメタノールでクチン中消毒しないと…」

「…エタノールだろバカ。つか、トコトン失礼な奴だな、オマエ。」

…と、自分のミネラルウォーターを奪われた挙句に文句まで言われたにも拘らず、最後までマイペース振りを発揮する恭平。この自信と説得力はどこから出てくるんだろう…そんな事を考えながら、瞬一は彼の後に続いて走っていた。

「相田君、これから部活？」

放課後。教室で日直の作業を済ませていた瞬一に、一人の女子が話し掛けていた。

「あ、うん。このゴミ捨ててきたら行くよ。先行ってて。」

「…あれ？相田君、日直じゃないよね？」

頭に疑問符を浮かべて質問する彼女に、苦笑いを浮かべながら応える瞬一。

「ん…山崎の奴、日直なのを忘れて帰っちゃったみたいでさ。もう、教室に俺しか居なかったから、しょうがなくね。」

「え！？それじゃあ、日誌も、黒板も全部？」

「ははは…まあ、もう終わるから。」

つまり瞬一は、日直の作業を忘れて…いや、恐らくはサボって帰宅したクラスメイトの尻拭いを、文句も言わず、自ら進んでやっていたのである。

「もー、しょうがないなあ…ホントにお人好しなんだから。」

「栗原だって、似たようなモンじゃないか？」

呆れている風に瞬一に注意をする彼女…栗原あおい。だが、彼女の表情はどこか、そんな彼を讃えているかのようにも見えた。そして彼女は、瞬一の返答には応えず、彼の手伝いを申し出ていた。

「も〜ほら…いいから、そのゴミ捨ててきちゃお？」

「え？いいよ、栗原は先行ってろって。」

「二人でやれば、いっぺんに終わるでしょ？」

こんな事に付き合う必要は無いと、瞬一は彼女の申し出を軽く拒否する。が、彼女も引かない。瞬一は、少し照れた表情を隠しながら、ボソッと独り言のように呟く。

「(お節介…)」

「何か言ったかな？」

悪戯っぽく笑みを湛えて瞬一の方を見るあおい。そんな彼女に感謝しつつ、瞬一はわざと拗ねた風を見せて承諾する。

「何でもないよ…じゃ、お願いします、あおい様。」

「素直でよろしい！」

何故か嬉しそうにニッコリと笑ってゴミ箱を持つあおいを促し、二人は焼却炉に向かった。

「そういえば、さあ…」

「え？」

並んで歩きながら、あおいが何かを思い出したように瞬一に話し掛ける。

「あの時は、今日と立場が逆だったね。」

「あの時…？」

「ホラ、入学式の日の朝だよ。」

「ああ…」

あの日の事を思い出すのは今日二度目だな…と思いながら、瞬一は当日の記憶を呼び起こす。

「あの時は、あの子に泣き付かれてた私を、相田君が助けてくれたんだよね。初対面だったのに…」

「いや、だってあの時、明らかに困ってたじゃないか、栗原。」

「あはは…迷子の女の子にイキナリ泣き付かれたら、誰でも困るよお〜。」

…と、当日の事を思い出して顔を赤くするあおいの顔を見ながら、瞬一はまたも回想に耽っていった。

「ふわぁ…眠い。いよいよ今日から高校生だってんで、少し興奮しすぎたか？タベは、良く眠れなかったもんなぁ。」

入学式を控え、少々緊張していた瞬一は、前日の夜になかなか寝付けず、寝不足状態になっていた。彼は昔から、楽しい事や心配事など、激しく動揺する事態が目前に迫ると眠れなくなるのである。今朝も、明け方になってやっと寝付いたところを、目覚まし時計のベルに叩き起こされたのであった。

「学校に着くまで、挨拶の練習でも…ん？あれは…」

未だに眠りを欲する頭をムリヤリに揺り動かし、何とか眠気を退けようとしていたその時…彼の視線に飛び込んできたもの。それは…自分と同じ学校の制服を纏った女子が、小さな女の子に泣き付かれているという光景であった。

「何か、すんげー困ってそうな雰囲気だよな…うわ、泣き出した！こりゃあ…見て見ぬ振りには出来ないよなぁ…やれやれ。」

ふうっ…と気合いを入れ、その二人の方に歩を進める瞬一。そして、内心のドキドキを抑えつつ、話し掛ける。

「ねえ、君。」

「え？…あ、あの…」

更なる「見知らぬ人物」の登場で、怯えたような表情になる彼女。



「…その、怪しい者じゃ無いから…こ、この制服を見れば判るでしょ？」

「あ…」

同じ学校の制服…しかも新品。その要素を確認して、互いの表情が穏やかになる。そして瞬一は次に、涙でグシャグシャな顔のままの少女に問い掛ける。

「…えっと、お嬢ちゃん、お名前は言えるかな？」

「えぐっ…えぐっ…ママ〜〜！！ママはどこ〜〜！？」

当然というか、今の彼女に回答能力は無い。

「あー…まあ、そりゃそうだろうなあ。」

「さっきから、これの繰り返しで…でも、このままジッとしてるわけにも行かないですよね…」

「そうだね…」

さて、どうしたものか…と頭を捻る瞬一に、傍らの女子が問い掛けて来る。

「ねえ、あなたもこれから武蔵野高の入学式に行くんですよね？早くしないと遅刻になっちゃいますよ？」

「おいおい…この状況を見て、一人だけ立ち去れるほど冷たい奴じゃないよ俺は…それに君だって、状況は同じなんでしょ？」
「それはそうなんですけど…見ず知らずの方にそこまでしてもらうわけにはいきません～」
「いやいや？君も十分この子とは関係ないんだろ？」

互いに今日が入学初日と言う状況で、目の前には迷子の女の子…放り出して立ち去っていくわけにも行かず…途方にくれる二人であったが、そんな事はお構い無しに更に泣きじゃくる女の子が目に入る。

「えぐっ…えぐっ…ママ～～！！」
「…とにかく、今はこの子のママを探す事にしようよ。」
「あ…それより、交番に行ったほうが良いのではないのでしょうか？もしかして、お母さんも来ているかもです。」

とにかく現状を打破しようと何とか足掻こうとする瞬一に対し、少し冷静な提案をするあおい。そして、彼女の提案に「なるほど」と頷いて、交番まで移動することを決めた瞬一。相変わらず泣き声を上げる女の子の手を引いて、「大丈夫だからね、必ずお母さんを探してあげるからね…」と必死になだめながら、二人は歩を進めた。

…と、そんな彼らの横を通り過ぎる一台のバスの中に、彼らと同じ制服に身を包み、ボンヤリとその様子を窺う目があった。

「…なあにやってんだ？あの二人…今日制服を着てるって事は、入学式…だよなあ。アレじゃ遅刻確定だな…」

眩きながら彼は、泣きじゃくる女の子を優しく誘導するその二人の顔を、しっかりと目に焼き付けていた。



「あの一、すみません。迷子の女の子なんですけど…」

交番に到着し、中で何やらメモを取っていた警官に話し掛ける瞬一。

「おや？…もしかして、今連絡のあった女の子かな？」

「連絡？」

「ええ。いま、駅の反対側にある、西口交番から連絡がありましてね。4歳の女の子を探している母親が、今、事情を説明してるそうなんです…ちょっと待ってくださいね、今、向こうに連絡しますから…」

瞬一の問い掛けに、意外な回答をしてくる警官。女の子はキョトンとしているが、案内してきた二人は目を丸くしていた。…で、待つこと15分。母親と思しき、新米ママさん風の女性が、こちらに歩いて来るのが見えた。

「ルリ！！」

「あー！ママー！！」

不安と悲しみの涙が一気に喜びの涙へと変わり、女の子の顔に笑顔が戻った。その姿を見て、思わず歓喜の声を上げる二人。

「よかったあ〜！」

「ああ…ありがとうございます！！」

こうして女の子は、無事に母親の元に返す事ができた。女の子の母親に引き止められ、『是非にお礼をさせてくれ』と言われたのだが、彼らとしてもこれ以上時間を割くわけには行かず、二人はその申し出を丁重にお断りしたのだった。

再び学校の方へと歩を進め始めた二人。だが、既に洒落にならない時刻になっていた。

「……九時半、か…まあ、あれは無視できないしな。しょうがないか。」

「でも、無視しようと思えば、あなたは行けたのでは？」

「お生憎さま。俺、ああいうシーンを無視できないんだよ。」

「優しいんだ…」

彼女の思いがけぬリアクションに、思わず照れる瞬一。

「い？あ、あはは…そ、そういう君こそ、一人で歩いてる女の子なんぞ、よく見つけたね？」

「ああ…スカートが脱げそうになるぐらい、思いっきり引っ張られてたから。」

顔を赤くしながらスカートを押さえ、その時の模様を振り返るあおい。その姿を見て瞬一は、同行していた女子が、思いの他…いや、思い切り可愛いという事に改めて気付いていた。

「…どうかしたの？」

「え！？あ、いや…なんでもないよ！？」

平静を装う瞬一であったが、その声は裏返っていた。その様子を見て、あおいも照れてしまっていた…が、今はそんな場合ではない。事は一刻を争うのだ。

「あ…と、とにかく、今からでも学校に行きましょ。」
「さ、賛成。初日から無断欠席なんて、洒落にならんからな。」

現実には引き戻され、冷静さを取り戻した瞬一。そして二人は現状打破に向け、最善の方法を模索する。

「…あ、学校の電話番号、確か手帳に…」
「俺が連絡しとくよ…そういや君、名前は？」
「あおい。栗原あおいです。」
「栗原さんか…俺は相田瞬一。よろしくね。」

こうして二人は、妙な縁で知り合ったことを笑いながら、大幅に遅れて学校に向かう事になったのであった。

「あのあと、汗だくになりながら体育館に突入して…既に入学式終わっててね。」
「いきなり鬼軍曹に絞られそうになったところを、守山君に助けてもらったんだよね。」

笑いながら、入学式当日の事を思い出して語る二人。と、そこで瞬一が、ある疑問を口に出す。

「そういえば…どうしてあの時、恭平はあの事を知っていたのかな？」
「バスの窓から見てたのさ。」
「のわっ！！きょ、恭平！？いつからそこに！？」

不意に真後ろから声を掛けられ、飛び上がる瞬一。そしてあおいも、やはり驚いて焦りの表情を見せていた。

「会話に熱中しすぎだぜ…で？瞬一、何でオマエさんがゴミ箱なんか持ってんだ？」
「いつものお人好しパワー炸裂だよ。」
「しょうがねえなあ…」

思わず溜息をつく恭平。予想通りの回答に呆れ、もはや小言も出ないといった感じである。

「あ、栗原。ユカが探してたぜ。」
「ホント？あ…でも…」
「ゴミ箱なら俺が持ってやるよ。あいつ今、自販機のトコにいるから。早く行きな、待たせると後が怖いぞ。」

手伝いを途中で放棄する事を躊躇ったあおいを促し、購買部付近で待つ友人の元に行く事を勧める恭平。

「うん…ゴメンね、じゃあ相田君、また後でね。」
「おー。音楽室で待ってるよ。」

恭平にゴミ箱を手渡して立ち去っていくあおいに、先に部活へ行く旨を伝える瞬一。その別れ際、二人が互いに微笑みあっている様を見て、恭平が何やらニヤニヤしている。

「…？ どうした恭平、なにニヤついてんだ？」
「ん？…いや、お前らもやっと進展してきたのかと思ってな。」

「な・な・な・なニを言ってるんだ、お、オマエ！？」

唐突に、しかも凶星を突いてきた台詞に驚き、瞬一は狼狽する。既に瞬一とあおいの双方が惹かれ合っているのは誰が見ても明らかなのであるが、本人達が互いに照れあって、仲が進展しないのである。見ていて面白いのだが、そろそろ次のステージに進んでもいい頃だな…と思い始めていた恭平は、そんな二人のアシストをする形で、こうして時折カマを掛けているのだ。

「…いや、結構一緒にいる事が多いからな、オマエと栗原。かなり仲良く見えるぜ？」

「そ、そーか？」

視線を逸らし、冷静を装いながらバレバレの誤魔化しを試みる瞬一。しかし、そんなものは当然、恭平には通用しない。

「まあ、伊達にペアで入学式に遅刻して来てないよな。」

「だ、だからアレは～！！」

「はいはい…判ったから、廊下で大声出すの、やめような。」

「うっ…さ、サッサとゴミ捨ててこようぜ！」

何とか話題を変えようと焦る瞬一を見て恭平は、これはまだまだ進展しないな…と、苦笑いを浮かべるのだった。

「ふー…吹奏楽部は文科部のくせに、トレーニングあるからなあ…疲れるわ。」

「ふふっ、音楽の演奏には、とても体力がいるんだよ。」

部活も終わり、帰り支度を整える瞬一とあおいの二人。

「（…そういえば俺、栗原と二人でいることが多いよな…俺としては嬉しいけど、栗原はどう思ってるんだろう…）」

先ほど恭平にツッ込まれた事を思い出し、隣を歩くあおいの顔を盗み見ながら、瞬一は考えていた。確かに自分は、隣を歩くこの女子に好意を抱いている。だが、彼女にとって自分はどのような存在なんだろう…と、気になり始めていたのだ。

「…どうしたの？」

「あ！ご、ゴメン…つい、ポーっとしちまって。ちょっと疲れたのかな？アハハ…」

ジッと顔を眺めていたのを気付かれ、慌てて誤魔化す瞬一。この時、あおいも瞬一が見ている事に気付いて赤面していたのだが、瞬一の方から見て逆光になっていた為、それは気付かれなかったようだ。

「ほ、ほら…早く帰ろうぜ。」

「う、うん！…あ、そだ！今日のゴミ捨てのお礼、駅前のマックでいいよお〜。」

「ゲッ、俺のおごり？…途中で居なくなったじゃん…」

「いいから！ほら、行こ！！」

…と、照れ隠しもあってか、互いにテンションを上げながら昇降口を背にする二人。そんな様子を靴箱の陰から覗いながら、疑問符を頭に浮かべる人影があった。

「…あの二人、あれでどうして進展しないのかな…」

「さあな…どう見ても付き合ってる同士にしか見えないんだがな…なあ、あの二人、放っといっても大丈夫なんじゃね？」
「ダメだよ恭ちゃん！友達として、最後まで面倒見てあげなきゃ！」

そこに居たのは、恭平と、それにツッコミを入れる彼の恋人…小石川佑香の二人。彼女は二人の後姿を目で追いながら、ニヤニヤと笑っている。

「はあ…面白がってるだけだろ、絶対。」
「そんな事ないよお、私は純粋に友達として…」
「説得力ねえし…なあ、そろそろ俺達も行こうぜ。ホレ、そんな格好じゃ、後ろから見放題だぜ。」

ポン！と、中腰の格好になっている佑香の尻を軽く叩く恭平。

「やだエッチ！もう、そういう事は後でやってよ！」
「（…お膳立ては揃ってるんだ…あとは勇気を出せるかどうか、だぜ。頑張れよ瞬一！）」

顔を赤くして抗議する佑香の頭をポンと押さえながら、恭平は心の中で瞬一にエールを送っていた。そんな彼の思いを他所に、瞬一はただ、隣を歩く彼女の気持ちを探ろうと、必死になっていたのだった。

翌日。瞬一は、またも昼休みを中庭で過ごしていた。校舎の中に居ても冷房なんか無いし、だったら蒸し暑い室内に居るよりも、風通しの良い中庭に居た方が良い…という理由による行動だった。

「ふう…暑いことは暑いけど、あの中よりはマシだよな…」

と考えながら目を閉じて、昼休みの残り時間を使って寝不足を少しでも解消しようと試みたその時…

「ぐえっ！！」

彼の顔面を、バレーボールが直撃していた。自分の顔面を直撃したそのボールを拾い上げ、更に周りを見渡すと…そのボールを飛ばした本人と思しき人物が、こちらに向かって走ってくるのが見えた。

「ゴメンゴメン、大丈夫！？」
「こっ…小石川！？」

長い髪をポニーテールに纏めた、切れ長の瞳を持つクラスメイト…佑香であった。

「あはは、痛かったぁ？でも大丈夫だよな、男の子だもんね。うん！」
「オマエなあ…痛いのに男も女も関係あるかい。」

ボールを手渡しながらも、ブツブツと文句を言う瞬一。そんな彼を、佑香は軽く退ける。

「こらこら、過ぎた事をいちいちウジウジいわない！」
「それ、ぶつけた奴の台詞じゃないだろうに？」
「お生憎さま。それ、ぶつけたのはアタシじゃないんだな〜。」

ニヤリと笑いながら、瞬一のツッコミを否定する佑香。そして、その後ろから走ってきたのは…意外な人物だった。

「えへへ…ごっめーん！！」

「く、栗原…なに、バレーやってたの？」

「うん、ただトスし合ってるだけだけどね。」

自分の顔面を直撃したボールを放ったのがあおいだと判り、文句を言い辛くなってしまった瞬一。だが、ここで何も言わなかったら、彼女に好意がある事が、横に居るクラスメイト…佑香にばれてしまう。それを危惧した彼は、冗談を交えた軽い抗議をあおいに向ける。

「…へえ、最近のトスは随分と威力があるんだな？」

「あ、あははは…」

笑って誤魔化すあおい。それをフォローするかのように、佑香が口を挟んでくる。

「あおいってば、アタシの絶妙なトスに見事に反応してね〜。素晴らしいアタックだったわ…それにしてもアンタ、何であんな所に寝てたのよ？」

「そういえば相田君、良くここでお弁当食べてるよね。」

いつの間にか話題が切り替わっていたが、瞬一としてもいつまでもボールの事を話しているのは都合が悪かったので、内心で佑香に感謝しつつ、質問に答えていた。

「ああ、教室の中の、ムシムシした空気が嫌いなんだ。せめて昼休みぐらいは、あの中から脱出したいのさ。」

「へえ〜。こんな炎天下でお昼なんて、物好きだなーと思ってたけど。」

「メシ食ってる時は、炎天下じゃないんだよ。食い終わる頃に日が傾いて、影が動いちゃうけどね。」

…と言って、頭上の楡の木を見上げる瞬一。

「ふーん、気持ち良さそうだね〜。今度から私も誘ってよ。」

「え？ああ、構わないけど？」

あおいの意外な申し出に驚きつつも、心の中でガッツポーズを決める瞬一。本人は気付いていなかったが、その表情は微妙にニヤけていた。その反応を見てか、あおいも嬉しそうに微笑んでいた。

「そうだね、ここで皆でランチタイム、ってのも悪くないね。」

「え…あ、ああ…そうだな。」

横からの佑香の発言で夢心地を覚まされ、落胆したような表情を見せる瞬一。

「ん〜？なんか、ご迷惑そうねえ？アタシはお邪魔かしら？」

「え！？そ、そんな事ないよ？うん、恭平も誘って皆で…いいんじゃない？」

「ふーん、何か怪しいわねえ？」

「な、何でも無いってば！」

わざと意地悪そうな表情を湛え、必死に誤魔化す瞬一を追い立てる佑香は、本当に楽しそうであった。そんな彼女のツッコミから逃れる為、瞬一は強引に話題を切り替えた。

「あー…そ、それにしても、制服のままでバレーか？汚れるし、それに…」

「それに…？」

「あ、いや、なんでも…」

発言してから、しまった！と気付いて、思わずその先を言いよどむ瞬一。それに対して、あおいが疑問符を浮かべるが、彼は更に答えに困ってしまった。

「ははぁん…」

「な、なんだよ？」

「ご心配は無用よ。ちゃんと…ほら！！！」

と、瞬一の懸念を瞬時に理解し、バツとスカートを捲り上げる小石川だったが…悲鳴を上げたのはあおいだった。

「きゃ！！ちょ、ちょっとユカちゃん！！なにすんのよ！？」

「ね、ちゃんとスパッツ穿いてるわよ。」

「も～！！捲るんなら、自分の捲ってよ！！」

「いやーん、だって恥ずかしいじゃない？」

「私だって恥ずかしいよ！」

あおいの抗議を涼しい顔でかわし、ケラケラと笑う佑香。そんな彼女の後ろから、恭平が呆れ顔でツッコミを入れてきた。

「おいおい、お前ら…ギャラリーが完全に引いてるぞ？」

「え？」

「あ、あは…」

彼のツッコミで我に返った二人が、各々に照れ隠しをする。そして、発言に困る瞬一に助け舟を出すかのように、今度は彼に向かって話題を振る恭平。

「それとも、瞬一には刺激が強かったかな？いろんな意味で。」

「う、うるさいな恭平！」

ニヤニヤと笑いながら、瞬一を追い詰める恭平。その横に、スカートを捲られた事実をすっかり無視され、瞬一とは別の意味で顔を赤くしているあおいが居た。

「あ…く、栗原…ゴメン、俺のツッコミのせいで…」

「え？あ、その…相田君は悪くなくて…もうっ、ユカちゃんってば！」

二人とも完全に照れてしまい、もう支離滅裂であった。

「はいはい、悪かったわよ…ところで恭ちゃん、どうしてここに？」

「ん？ああ…またコイツが日干しになってるんじゃないかと、ちょっと心配になってな。」

「ひ、日干し！？」

昨日の事を知らなかったあおいが、驚いて瞬一の顔を覗き込む。

「あ、いや…汗をかきすぎてさ、ちょっと脱水症になりかけただけで…」

「ちょっとじゃ無いよ、ダメだよ相田君…」

「ご、ゴメン…」

瞬一を気遣って、真っ青になるあおい。そんな彼女を見て、瞬一も思わず謝っていた。

「…ふうん…ねえあおい、時々見張りに来てあげたら？」

「え？あ…わ、私は構わない…けど…」

佑香の提案に、照れを隠し切れないあおいと、意外な展開に驚いて狼狽する瞬一。そんな二人を交互に見比べて気を利かせたのか、恭平が佑香を促して立ち去ろうとする。

「…そうだ佑香、ちょっと付き合ってくれや…ワリィ瞬一、ちょっと用事を思い出した。また後でな。」

「え？あ、待ってよお！」

返答を待つ事無く、そそくさとその場を立ち去っていく二人。取り残された瞬一とあおいは、暫くモジモジしていたが…意を決したように、あおいの方から口を開き、時折ランチタイムに乱入する事を宣言していた。その宣言を瞬一が否定する筈もなく、まさに「瓢箪から駒」な展開となり、彼は飛んできたバレーボールに感謝していた。

「相田く一ん。」

「お？どうしたの栗原、早く音楽室行かないと、練習始まっちゃうぜ？」

ランチタイムの約束から数日経過したある日の放課後、教室に残って作業をしていた瞬一に、あおいが話し掛けていた。

「教室に楽譜忘れたの。相田君は…そっか、日直だよね。」

「そ。焼却炉行ってきたら終わりだから、先行っててよ。」

そんな瞬一の発言を、あおいが聞き流す筈もなかった。

「私も一緒に行くよ。二人でやれば、早いでしょ？」

「ん…じゃあ、お願いするかな。どうせ断っても、ついて来るでしょ？」

「えへへ。」

こうして、またも二人でゴミ箱の処理をする事になったのだが…彼らが焼却炉に着いたとき、そこには予想外の行列が出来ていた。木工室から木の廃材が大量に持ち込まれ、その焼却に時間が掛かっていた所為であった。そして順番待ちをしている間に、音楽室から楽器の音が聞こえ始めた。

「…ああ、練習始まっちゃったね。」

「だから先に行けと…俺の巻き添えで、君まで練習に遅れる事なかったのに。」

「いいよ、一度やるって言った事を放り出すほうが嫌だもん。」

あおいの返答に苦笑いを浮かべながら、瞬一は思わずボソッと本音を口に出してしまっていた。

「…ま、そこが君の良い所なんだけどな。」

「…え、何？」

瞬一の漏らした本音を聞いたあおいは、とぼけて聞こえない振りをして、彼に復唱を求めた。が、当然というか…彼の返答は、彼女の期待したものとは違っていた。

「あ、いや…お節介だな、って言ったのさ。」

「（もう、素直じゃないなあ…）」

一度目の発言をしっかりと聞いていた彼女は、内心で非常に残念に思っていた。当然であろう、彼の本音は二人の間柄を進展させる切掛けに、充分なり得たのだから。

そして、教室の前まで戻ってきた時…ドアに付けられた窓から教室を覗いた瞬一が、思わずあおいを制止する。

「（…え！何？どうしたの！？）」

「（シッ！！アレ見ろよ、アレ！！）」

僅かにドアを開き、その隙間から見えた光景に…二人は固まっていた。



「（おいおいおい～！何で教室でそんな事してんだよ～。）」

「（ユ、ユカちゃん…仲いいとは思ってたけど、そこまで…）」

「（つ、付き合ってたのは知ってたけどな。ここまで大胆だとは…）」

想定外の出来事に、二人は完全に狼狽してしまっていた…というより、このままゴミ箱を放置して立ち去ってしまうわけにも行かず、途方に暮れてしまった。が、事態は意外な形で収拾した。

「何やってんだ？」

「ひ、ひいいいいいい！！」

「はわわわわわわわわ！！」

二人のヒソヒソ声に気付いていた恭平が、ドアの前まで来ていたのだった。そして、呆れたような声で二人に言い放つ。不意を衝かれる形となった二人は、腰を抜かさんばかりに驚いていた。

「…ったく、お前らなあ…気ィ遣うんなら、もうちょっと上手に遣えよな。」

「しょ、しょうがないだろ！？あんな場面、見慣れてないんだから！！」

「そ、そうだよ～！きよ、教室であんなこと…！！」

本来ならば、文句を言うのは覗かれた恭平たちの方なのだが、動揺した二人は、逆に恭平に抗議を始めてしまっていた。

「も一、相田はともかく、あおいまで覗いてたとはね～。」

「べっ、別に覗いてたわけじゃないって！ぐ、偶然見えちゃっただけだよ！！」

「そっ、そうだよ！こんなところでキっ、キ…キスなんかしてたら、覗かれたってしょうがない…と思う…」

少し遅れて、佑香が会話に参加してくる。覗かれた事に腹を立てる風でもなく、苦笑いを浮かべながら、形だけ文句を言っているといった感じであったが、その発言に対しても、やはり言い訳を重ねてしまうあおいと瞬一。そんな二人の顔を見て、佑香がニヤニヤと笑ってからかい始める。

「あ一、二人とも、顔真っ赤だ～！！」

「そ、そんなことないもん！もう…行こ、相田君！」

「お、おう！れ、練習、終わっちゃうよ！」

もはや恭平たちの顔をまともに見ることも出来なくなっていた二人は、そそくさと逃げるように立ち去っていた。すっかり気まづくなってしまった二人は、互いに話し掛けるタイミングを覗いながら、モジモジしていた。

「…な、なんか言ってよ。」

「そ、そんなこと言われても…う～、何かショッカー。友達のあんなシーン、見ちゃうなんて…」

やっとの事で瞬一が口を開くが、あおいもまだ立ち直っては居なかった。そして、また暫く無言で歩き続けていたが…今度はあおいが瞬一に語りかける。

「…ユカちゃんと守山君、仲…よかったね。」

「そ、そうだね。」

「かなりビックリしたけど…でも、ちょっとだけ、羨ましかった…かな。」

「え！？」

あおいの発言に、瞬一は驚いていた…いや、自分がどうリアクションすべきか、完全に判らなくなっていた。あおいはその時、真っ赤に頬を染めて、瞬一の次の台詞を待っているようだった。だが、先刻の事と相まって彼は完全に狼狽し、判断を誤っていた。彼女は今、親友のあんな場面を見て動揺してるだけだ…そう思っていたのだ。

「…（いくじなし）。」

「え？な、なんか言った？」

あおいがボソッと放った小声の台詞も、彼は聞き逃してしまった。その一言は…まさに彼女の心の叫びであったのに。

「…何でもないよ。さ、先輩に怒られちゃうよ？早く行こう！」

「あ、う、うん。」

次の瞬間、無理に笑顔を作ったあおいが、瞬一を促して歩を進める。お人好し…いや、奥手すぎる二人の受難は、まだまだ続くのであった。